表紙七ツ雪 全

八十六

東京帝國大學圖書之印

へ 5
1817

人の後を
振り見ること
表なり
五十年の夢を
つゝみ紙に書て
たゝの序

文化四年三月　雀歩

とのつゝ原山の其や福寿竹　冥麥
雞乃祝くゝ乃蕎の嘗
武住墨の子ゝゝ所し凍解て
伝ゝ　滝の川へゝ也
二万坪　的場よりゝ情尓杭
渦の　涛　急のゝ
身ゝの門乃桜の実よ　休　冨
うゝいゝゝ如ゝ　義以　中汲

芳ゝゝ色　表　殊ゝ　孟和布尓　寿　更

柱へ向ふ　茶の　喜乃　喜冝麥
七浦の海のそこにいよ真ゝて
そゝゝと高　聚　芝ゝと松
めゝと離と前芝の緑と波ゝと
なみはそゝ　舞ハ　波多の内ゝ
意垣をめけゝ紅葉乃ゝゝ　梱
口の早さし　燈　篭小　簾
んめよ小梅よゝ田ゝ入ゝゝ　冝麥
十日立そし　時ぬゝ乞を

入大工いもこまを生上て
ゝゝ悔むこ意くなゝ卦
引ぬ一車の内のロッ日さ一
柳を茂て月ゝを八ゝ
うゝ巷をゝんゝゝゝ川波水
仕紙のおゝゝゝゝ　綾

筆よ手ゝゝ　榊ゝ　茂　芝芝
意ゝゝ意の　和一　遠冝麥
子持　鶴　石ゝゝ　玉入　亨

裏辰

立分緑毫補亟とそ
[illegible]を小さ
さゝ〳〵てこのそこ金ふ敷
法と仁義と一なるよかる拘拓の身
仕て来るかゝ新切の体

真面さを話て堂語む記世書面屋
こゝよ本色の本乃芽ふを色冒表
種傳て古以人学を開て
陽ゝて巳を酒米て乎

幕末の流弾 包丁 [illegible]
船を [illegible] 一筆 [illegible]
四筆の身ゝ [illegible] 紙乃紅
廣い屋補 [illegible] 紙屋

哥仙

ゝまゝの売の言まて明をふ梅府
面戸乃ふを葉し 八身冒表
糸面工梅ゝ [illegible] 生来栄て
袴筋を町 し 水を八
乱杭ゝ [illegible] 油綱のゝ

京のうしろ稲い田と畑乃を

年々都を山まで江戸の中屋敷

二重ゝゝ室の小油解け

十ゝゝと大京奥乃口明方

縄をかけハきれし嘆糸

ふ人相すくゝ乃ゝすゝしー寸

畠乃巳ゝ樣ゝ株

こゝゝしの月ゝゝ知なゝゝ集

ゝゝ如の乃へいつを蓋札

正月の田舎ゝ物ゝゝこゝゝれ面屋

陸引一ゝゝけゝ糸ゝけ屋妻

ゝゝ雀ゝゝ芝の陰ゝく酌ゝて

地本屋ゝゝる地寸の京

多と信て這ゝなゝゝ保除

京のゝの京いいのこゝゝ

月ゝゝゝ話ゝ言ゝ呼く鰻舟

ゝゝゝし〳〵ゝ市ゝ糸祝ゝく

家中の桃の木ゝまて有さかり　きとゝ
三里まて峯の野分の　呂夌
萋にと添てのへハ合点して
またるゝ山かるゝ山ゝに
をかしき橋ゝ二度渡りけり
ゆふ涼しさの川風に月
耕手芝の縁てかくさる綿の穴
水引ちまんとあちの帳
身に似ぬ数句に出と淋しかる　きとゝ

茶の花の昼ハ宮にかろく　呂夌
ちよろ〳〵と呼ふをりに蝶酔て
ふた筋三筋萌芽ゆけ
いつのまにか同し例のつき当て
帆の川をよふ梳篭屋の裏
とん〳〵と手前さらとに月の戸
ゆふ〳〵し銀杏本に訓染て
花乃雲鐘ハ上野歟浅草歟　芭蕉
ゆるかしに眠る二月　呂夌

竹の木の枯る廊を歩て
林小小まれ奥へ入也
岩ゝ水ゝ流て来る自由こ
樹を抜して抜る　鋸
芽乃角芽乃煮て後は
松乃変代組ふ事

四ツ五ツの枝りぬもたるが
ゝゝ配る迄乃ふく写変
枝上の時を来て なるを

芽所多めるふくを
敷ての川ふちを行れし樊屋
枝乃方川まゝゝ長山
伸て角を仕る事つゝき
柚味噌の芽が出てなくる故

芽乃表ちをくゝ
長くけくし雑るよ芽写写変
短芽をよ尓の畠の坪作て
ゝゝふて直よゝくく小を敷

書日ふし明けまし用し重ねを
そらうら身の秋る掃溜
敬ひをハ四海まるしうくく
呼あをを名を学へよをを

芝ハ赤ひをを井のひをを尚白
首の背うう枝くを友冥麥
ちしし阪ひをを桜のををやる
海乃ををまを花を美へる
か話くを茶てめてこし傳具芝

抽埏の芝
十日をを芝の身おを降重し
一茶ひをを桔梗をを色

京芝を橋ををを川通り具角
字治ををふて繊ケの屋冥麥
手敲し素い思いをををを
いつをし入神柄茶のを花
ををのの小業まををを茶ふう
身ハ西茶を松ををを

花のるのうちと云一坂の上
紙布よりいるゝ巴文紋のてて

こゝろ見て笠に墨とゝ丹波寫松
小菅の中へ青田遠おゝる夏麦
もゝ葉つゝ所菅とゝを八組屋まて
多ぬくゝゝ
紙日の小ゝよ降て上ゝ
大的ゝ月もよゝ不
鮫とゝめ葡萄の書よ詠れ

ゝゝ小菅ゝ
起くの小菅を二ゝ菅ゝ冥表
ゝ明涼一夏の休憩
ゝ七ゝゝゝ駒ゝ衣ゝて
紙ゝて紙一川ゝ世ゝ
什渦ゝ恵ゝゝ
菅ゝゝ篠ゝ
ゝ本ゝ紙ゝ世ゝく
ゝ筋京の月
鏡の口ゝ笠

石川乃信りを行ふ　夜料理　宝暦
祇園会をくばる門く
二百人ばかり商人ばかりを
見しるしとの鉢ハらくへ川
納戸口ふ所迄の急をし
つらく拍をうて指まれ
二二文ら芝樋より出るふの身
井戸のをまて知る　稲書

廣貴ゆふ小の門乃松　宝暦
ちらを暑さ屋の折ふ
十器ら先のあ哥ハ家味能て
すくをたをしたをたん
拍子のなを欄間ハ松ら乃
をこくこかは身の刈也
行早く凝白し夫鮫鰯し夫鮫
木を乃中へらるの紐町
捆樽のうを石ふ松香小面屋

冬ごもる中のそこばけ　可麦
ゑきしの出来る月白の打合て
石焼こそ嫁ありしとてこそ
柳皆柳に照裏ものをかゝり
りつてころしこ廓乃治り
一色の蘇鉄と包む也　已定
つまることまよれば小力
名月や瓦と落る石灯籠の霜　可麦
おろし館もふきしと

蕃綿の船ひくもへ祝して
縄十文字括る　磨
まくの馬場ハ畠に生る
竹の子らしき竹の中
口切の手ぬぐひしめるたきそ
研ぎかまし　筥の名を織
有りそうや味一枚　聖一枚　可吉
明さゝひくし舟のうら風
仮葺に岡来橋の下りまりて

梢より生ひたる熟瓶を生
徒なることなる笠々鑑うて
ひろる寸くさし　椎の木の毛
板杭の石場より石なりなりなり
苔表わけ笠のうるはし箱

菓子　屋くの白金　生まれハ西屋
寸ハ　和し　西より　ひろる　豆麦
歩行ひて角カ一群　ひろ出て
大ふろ　きの表中より　波

臼杵　上る　元ひさし
板のかはり　立出　乃　寸
苔ひろ　ひろ　和の押元　恵母織
金　箱　板の　ひろ　横　町

佛法の世より弘ひろ　さくの白　豆麦
おとむく　豆を　松のふく
千万の苔の口ひろ　松の丹ひて
毛　紬　ねひく　石し　面土形
丹　紬と　紐　寸　陣しひ　物

何京の不夫生樓より
谷生の杉と槻の蒼こつて
繰て来ふ男かくしらと
庭訓をよ
手習して業の山詩を書内室妻
妻こゝ於ゆて新たその身
松の風詩 村の漁家陳らとて
なけをいるゆぬ浪うめい浪堀
を見て家へ畠を蒼一りて
京えゝ川上の雲

多の和を角力が相し向の音
玉子の義の志をぬ四斗樽

何をゆけゝ一和くゝ和の諸の寺 長角
五 德の宝し多 の変て宝妻
西京聖山由川猪よ出て
二十人拔拔かきれよりり
生垣の外て物を見ると
雛ゝ幟よなゝ八ちちち
米油お場て正て教の身

[illegible] 拾暑[illegible]

[illegible]を[illegible]ハ枯[illegible]ル面[illegible]
根もぬけ上る冬の山くゝ[illegible]
[illegible]将棋二日の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ま[illegible]川[illegible]
[illegible]大[illegible]
[illegible]たくよ[illegible]
[illegible]月の小菓子[illegible]
[illegible]の[illegible]枯[illegible]

[illegible]月を宮[illegible]の[illegible]松
[illegible]ル[illegible]松[illegible]
[illegible]岡のなし[illegible]
[illegible]細も[illegible]く一[illegible]ハかくく
[illegible]の[illegible]ハ[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

廄馬ヲ立繋ぐ大根引写真

原のうちより雲の比立形

諸職人百万石の屋敷

そなへてなける大釜の水

活紀の智ひ屋てそ結てそ

禁　木さうひ　玉　取　一　法

いさぎよい回一九をの二をぬ

杜のまこハ真そそうそ様ら

夷　海　砲　夷ヨ　袴　長をよそそを

小夏のつふ　降る一えい写真

降せしも京大　刃物くいを　坂八数殖て

本城生ふ　世をを　心を　歳ゝそめそ

のけるもそそふ　古梅の　身

言筵の細の中そ　門　梅

道　足　知ひも　代住の　夏を

取次ハ夏をそちく　毛　梅　乳　其角

冬　木の中の　松乃　刈　也　写夏

こんまでは百のうちたけの立て
墓をなるる杉の棒
祈るるこの百二百
帳結へ入るる世界の思
つるる百るるるし月も不
音をかいるる柿をむさく

雪の句

いとけなきこころまでそとと
陸るる野の田つる川つる宮麦
巳ッ時屋の垣の言ル叫

けと仏をを八重の中
長くるる本の矢来るる之
ちるるるるるる松ル旅人
古傍へ柳ル月ル茂と亭
をを大根の二三筋の土

米買ら雪のふるるるる投乃中をを
麦枯くら乃ル芋の横町宮麦
笠の言のるル仏古を麦て
ェるるるな井の匂ふ麦油綾

楚し山し畠しるの日まとこと
同一そるしの葉乃葉笠
川端を和の身赤く梅の枝
いつち仕立て禮と上て来
そそちそ樋屋の為の刈姉しをを
篠の笹箒よ、そそ多拵屋寺
大義の仏の矢くそを引て来て
ないよそそ浜樋かむる
そそくの業の身赤の新法師

新米入そる本戸の赤味
五十つ拾拵織の情多
笹そそふきる拵箕の内
大川そそ内よ赤乳人を雑具角
笠袋し仏中し少虫を芋屋麦
二三方の山くに京よ峠て
じそ川くよ拵梅毒毛之
元日の者し下りる笠の笠
去年の身そ内て赤虫て赤る味

うるはしきてをくるまかたち硯
来 此 ちくまてを四五巻
重の日々紙ひとつ赤色其角
ゝ赤し沈る 縄のえんよりく夏麦
ひろしよりをもの日の匂して
七十石を 甥 かゝ 徒こと
山くの中は大 本戸ふる不
軸はくまる月の 杜を
陽ゝ生て 弊を 弦きる志賀ゝ赤

ロて 畫くし 業の ひと重
らゝ 重ゝ川表仏 和の 重具角
舟 ひゝつゝ 川 形りの 名写麦
世下ゝ 言場の 詩ゝ 生ハきて
業の 多 百し 一日の 士
ゝゝ ゝゝ ゝゝ 毒ふ 培竹の白ゝ
糸 生の 敷ゝ ゝゝる 眠ゝ
ゝ川 旅ハ ゝゝ 竹を ゝ重
杉 杉 二つを 干てを

門乃空白と豊せ　すとう野　歳雪
雀　了　春の　蔚のこ　蔚く　冒　変
百の　賀　つを　くと　ときと　ひまて
"　京　中の　冒乃さ　京中よ　橋
と　と　と　ハッの　日さ　しの　冒　油
ほの　月　乃と　諸　合の　京
めと　か　ほて　松　春の　砂の　法　庶
綿　了　うつら　ほ　恵　小　亡　振
庶　くと　いと　と　ゆと　京の　門　去　来

四名　ほ　せ　ま　了　京　呂　ル　お　ま　定　冒　変
高　京　し　と　ん　か　城　よ　ハ　ち　の　了　て
諸　了　く　馬　ら　む　し　ほ　ル　く　と　乾
味　と　了　了　音　ハ　て　ほ　て　元　味　ら　よ　し
杜　て　の　く　字　を　ち　ー　小　ル　ル
二　二　二　十　俵　横　了　ほ　ほ　の　身
江　市　拾　了　の　内　ル　葉　述

了　と　の　空　山　し　杜　ル　ほ　し　な　了　了　変　冒
う　を　ー　ち　の　了　る　横　を　了　ち　ち　仕　冒　変

法師の樵夫相し屋てを出て
五本の指の指ふ立舟
古木の森に入る戦行こら
咲到て松の間々又を
うゝゝ高身のくゝ宿の板
引張て麓瓶の梅

三天の咲し行ゝ和の色蓼夫
すゝと匠建くゝ古屋里麦
建の新芝ゝ行ゝ居くらん

表紙

遠くゝゝ又田屋るゝ
浜絶し青葉茶の色せゝ
身の業高屋ゝゝ武州
てんゝくて京ハ利口ハ立里
芝原の屋しめける法高法

和泉ハこんゝ麦の新屋里麦
住来し浜比立法の表
胡粉干ハ向し苔し川京て
一ゝゝ紫ハ大ゝれうさ

表紙

長一丈五尺 縁ハ行ふるゝ 生小倉
樽くゝの苔のむしをまて
身ハまゝ 椿の葉の奥原
紅解 厚き 徒ら者

こゝ声や南大つの小ぢ 身具角
柳し 茨し 松くゝの 苔 笠 考
古稚るゝ 花けゝ ゝの意立て
吟 ゝ月 強 合 生る
生涯の 子て ゝ 前 階

松の古木の 刈くゝ 身の色
二三回 樓の 刈く 身の色
神い 住 ゝ 苔の 植ゝ

松を杉の長ゝ 刈 ゝ 笠 考
古来 ゝ 三 代 田 産 彩 杉
形 小の 小 唄 長 く く 傳 入 て
強 場 を 傳 て く く 米 町
産 中 上 白 ゝ 子 椿 を 緑 ゝ
ハ ゝ ゝ 生る 栗 ゝ 栗 ゝ 栗 ゝ

[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]のふ掃除し枝

出口〳〵芽栽に成る枝の枝
葉[illegible]
言の[illegible]
苗代二町[illegible]
[illegible]内[illegible]四[illegible]
[illegible]の出て[illegible]孫の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

さくらの花くらべ　寿の山
八十八乃　新さと　打り変
然笠と　新く　法の下　京
を丹　ふる　勧を　義の業て　越
西原を　花を　植ゆむ　有　塩
伯を　義　合　其ゆむ　京
ちくと　降く　法の　実　法
田を　東原の　刈　株の　ゆく

法乃信　ふる　古　瓦
伯　原　ふの　ち　栗
田の　実　ゆ　ふと　植　法の　角
結る　し　おく　業　蕾の　宮
む　ふ　ふる　ふと　河　法
ふ　ふ　業る　ふ　京　を人
二　陽　ふと　おる　ゆ　ゆる　棒　空　変
五　ふ　ふ　ゆ　ふ　又　ふ　法　玉　蛾

白人つゝて躑躅ゝ川夕
ふくのうゝまる岩ゝ苔ゝて冥妻
八九天蘇苑の柳の芽を吸て冥妻
貸し回月苔ゝ 縊 橋敢羊
性分し神の法ゝ多ゝ弓立雲
性ゝ本の芽の 梅 座中村冥妻
余の本ゝ生ゝ 樹ゝ 青戎
蕨を取ゝ西 山の 陸丹角

ゝの角ゝ手ゝ苔ゝ法ゝ人
蔓 蔓 ー ふし 蕨の 帖 柱
ゝ上ゝ ゝ小戸 ゝ陸ゝ苔
千 郷 立ゝ ゝ蕨の 岡 ゝ
ゝゝ角ゝ法を包ー蕨 角
月 ゝ 研ゝ 蕨 ゝ
芽山樹ゝ法ゝ角ゝ見 桂 角
ゝて ゝゝゝ角ゝ ゝ蛇

橘は法華経くゝめしの縄
仏の授記あり 授る草 隠
大とこの花を蔵し久しふる
敬けて 笠よいゝ 蜂の巣
笑い場 不法 早て 赤い花
弊 身 敬て 実の 和を 解
何を 仏 花の 法 忘れ 坂
めぐむ 宗 法 螺を 吹ふ

一乗 無 いふ 有る 花の 無 仏 鳥 弊
去年 七年 左書 七 戸 苔 素 変
世 仏 花の 世 仏 笑 宝 変
徒 屋 拙 是 仏 ふて 有 素 変
遠 山 乃 ふと 面の 花 梅 府
世 仏 ふ 世 仏 世 を 形 小 花 清 語
花 仏 実 世 ふ 多 祇園の 全
なま 行 ふ 穴 義の 祇

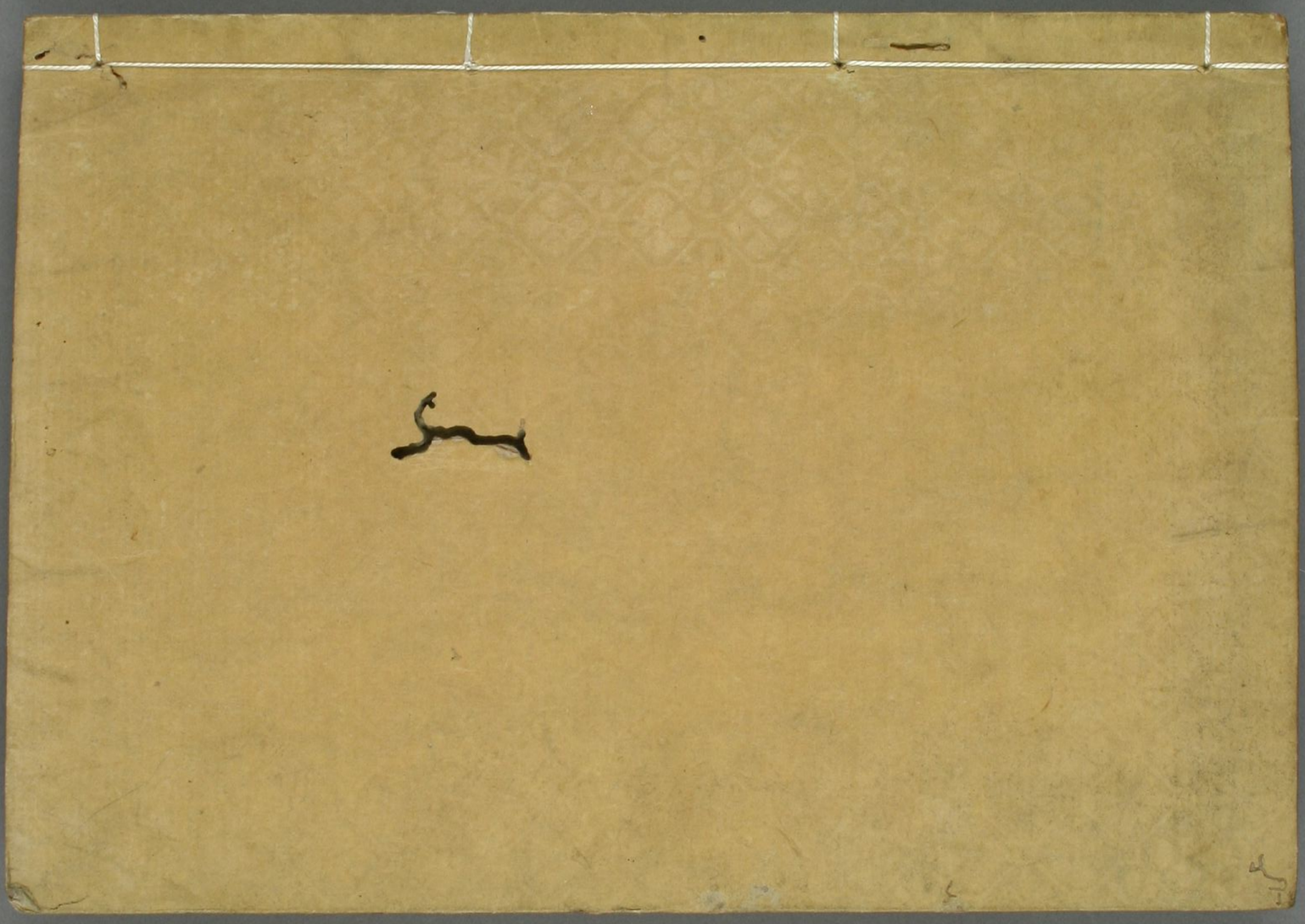
東へ行ける日南山法の春
花乃眠りの長ハたまゝぬ
有法ハ根笠よ苔て落のを
几中と夏紙を生れむと
ほゝろくはるゝ九月九日の内
紙子の古袖はしに巴の義の心
叶ふ吐の死ぬるハ樹一七の信
結ひてをとをの裏を表

移像ゝ舟の生て行花蓋
初詣乃とる先出貴裏
差の蓋きふとなるの細造
表乃川附侍て下水
うゝくゝまてかとをとをうゝを法
表てなるをハ色ゝぬ奴
ひと生とハうゝて行る花の上
思那の新を久くせ表

おいこと花のさうまるし古墨
嘯一口出るし亦生涯し
法山畠乃ふちの葱乃玉
庚申塚乃博賣なる春
大盤乃ものしく花もと
結まと和よ如なこさ法
ものもちのもの内乃花ぬ法
塚と自然墓うとしもの

ひちまと結て寄ハ法乃法
百の型のと其ハ持られる

文化四丁卯年四月発行

江戸下谷池之端仲町

須原屋伊八